

# 平城宮跡を守る

へいじょうきゆうせき

「おじいちゃん、明日、平城宮跡に行きたいな。」

小学校四年生のアツコは、おじいさんに声をかけました。

「いいよ。でもどうしてだい。」

「平城宮跡を守ろうと努力した棚田嘉十郎さんたちのことを本で

読んだんだけど、平城宮跡に嘉十郎さんの像があるって聞いて、

見てみたいなど思ったの。」

「棚田嘉十郎さんか。そうだな。じゃあ、明日は平城宮跡へ行っ

て嘉十郎さんたちのこと、ゆっくり話そうか。」

おじいさんの言葉にうれしくなったアツコは、明日が待ち遠し

くてその日はなかなか眠れませんでした。

「おじいちゃん、朱雀門って大きいね。」

翌日、おじいさんと平城宮跡に来たアツコはびっくりし

ました。

「ほら、アツコ。嘉十郎さんの銅像だよ。」

棚田嘉十郎の銅像は、朱雀門のすぐそばに建っています。

「本に出ていたとおりだ。」

目を輝かせて銅像を見上げるアツコに、おじいさんは話

し始めました。

「今から百年以上昔のことだけど、嘉十郎さんがこの平城宮跡の保存に力を尽くそうと決

めたのは、奈良を訪れた人たちに都のあとはどこかと尋ねられても教えられなかったか

らだそうだよ。そのころは、どこに奈良の都があったのか、ほとんどの人が知らなかつ

たらしいんだ。」



棚田嘉十郎の銅像



朱雀門

棚田嘉十郎が、「大こくの芝」と言い伝えられるところがあるというのは、明治二十九（一八九六）年の年の瀬のことだった。植木の仕事をしてきた嘉十郎は、奈良を訪れた旅人によく尋ねられた。

「植木屋さん。奈良は昔、都のあったところと聞いてきましたが、その場所はどこですか。」

ところが、都の場所がどこなのかは分からず、教えることができなかった。

残念に思っていた嘉十郎は、都のあとを自分で調べ、「大こくの芝」のことを聞きつけたのだった。さっそくかけつけて、言われたところを掘ってみた。すると、土器や古いかわらがごろごろ出てきたのである。

「ここだ。ここが都のあとにちがいない。」

嘉十郎の体はふるえた。だが、あたりは草ぼうぼうで、あちこちに牛のふんが、うず高く積みまれている。

「ここが、花の都と言われ、七十年あまりも栄えた平城宮のあとだとすれば、このままにしてはおけない。だれもやらないのなら、わたしがやろう。」

平城宮跡保存の運動に、自分の生がいをかけようと、嘉十郎はひそかに心にちかかった。

「おい、見ろ。今日も嘉十郎が行くぞ。植木のことしか知らないくせに、大それたことばかり言いよつて。いったいどんなもうけがあるというんだ。」

「大極殿あと保存のためと言って集めた金を自分のふところのためにためこんでいるらしいぞ。」

東大寺の大仏殿のかわらが夕日に輝き、やがて日が暮れようとする通りを、するどい目で足早に行く嘉十郎の後ろ姿を指さして、人々は笑うのだった。しかし、保存会の結成や土地買い上げのための募金運動、田を売ったがらない地主の説得など、目的のために精一杯走り回っている嘉十郎には、そんな声を気にする余裕はなかった。

平城宮跡に関心をもつ人があると聞けば、鉄道もまだしかれていない東北や九州、四国にも出かけて行き、寄付をしてもらった。政府に補助をしてもらうために、奈良と東京を五十回以上も往復したが、その費用はすべて自分の家の財産を売ってつくった。その上、買い取った土地は、県知事の名前で登録していった。

一番つらかったのは、

「田んぼを取られたら、明日からどうして生活していけばいいのか……。」

と、農民たちが団結し、土地買い取り絶対反対の運動を起こしたときだった。嘉十郎は、一軒一軒、何日もかかって説得して回るのだった。その燃えるような情熱と行動が人々の胸を打ち、協力する人が少しずつ増えていった。しかし、それと反対に、嘉十郎の家はどんどん貧しくなっていた。家財道具は次々になくなり、毎日の食事さえ満足に取れない日が多くなっていくのだった。

大正四（一九一五）年正月。平城宮跡と書かれた標木が立つ大極殿あとに、人影があった。嘉十郎とその子嘉蔵である。

「お父さん、大極殿あとの標木に、初日が照っていますよ。」

嘉十郎は、過労と栄養失調で見えなくなった目を見開き、標木をあおぐようにして言った。

「嘉蔵、おまえにもずい分苦勞をかけるなあ。中学校にも通わせてやれなくなって……。」

「いいんです。お父さんの努力で、こうして大極殿あとも保存されることになったのですから。」

「いいや、わたし一人の力ではない。わたしの呼びかけを多くの人々が分かってくれ、力をかしてくださったからこそなのだ。お前はその人々の心が分かるか。この広い広い土地の下に、この奈良の、いや日本の国の宝物がねむり続けている。それは、わたしたちみんなの心の宝庫なのだ。それを掘り起こし、いつまでも保存していく仕事をこれから始めるのだ。わたしは、病気には負けていないぞ。」



「そんな嘉十郎さんたちの情熱と努力が、今のこの平城宮跡の姿につながっているんだよ。」  
おじいさんの話を聞き終えたアツコには、なんだか目の前の平城宮跡が、これまで見てきたものと違うもののように見えてきました。



大 極 殿

「ねえ、おじいちゃん。

もし今、嘉十郎さんが百年前と同じようにここに立っていたら、この平城宮跡のにぎわいを見てどんなことを思っているだろうね。」

胸を熱くしながらそう言うアツコを、おじいさんは笑顔で見つめていました。朱雀門を通り、嘉十郎の銅像の指さす方向に歩いてきた二人の前に大極殿が見えてきました。大極殿のかわらは、太陽の光にまぶしく輝いていました。



参考 奈良県郷土資料「大極殿あとに初日が照る」

写真提供 社団法人平城遷都一三〇〇年記念事業協会

奈良県教育委員会

○ 過労と栄養失調で目が見えなくなっても、平城宮跡の保存のために力を尽くそうとする嘉十郎をつき動かしていたのは、どんな思いだったのでしょうか。

○ おじいさんの話を聞いたアツコには、平城宮跡がこれまで見てきたものと違うもののように見えてきたのはなぜでしょう。

奈良県教育委員会

<http://www.pref.nara.jp/gakko/> (学校教育課Webページ)

